

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：44306

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13593

研究課題名(和文)新発見南方熊楠英文論文の資料的研究

研究課題名(英文)Reserch on Kumagusu Minakata's Newly founded English Manuscripts

研究代表者

志村 真幸(Shimura, Masaki)

京都外国語短期大学・キャリア英語科・非常勤講師

研究者番号：00625204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：南方熊楠の英文論文に関する調査を、イギリスおよび和歌山で実施した。19世紀後半に『ノーツ・アンド・クエリーズ』や『ネイチャー』のような学術誌でありながらも、商業誌である雑誌群が出現したことによって、潜在的な知識人層の知見が共有化され、科学や学問が急速に拡大した。そのことによって科学技術の社会における重要性が増し、現代へとつながっていくことになる。そのなかで南方熊楠が果たした役割は、学問世界が世界化する過程で、ヨーロッパ/アメリカ的な知を、アジアからの情報によって相対化させたことにあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

南方熊楠は『ネイチャー』に投稿した最初期の日本人であり、『N&Q』誌なども合わせれば、英文論文の総数は約400篇にのぼる。これほど大量の論文が世界最高峰の科学誌・学術誌に掲載されえたのは、アジアの知見を欧米の科学・知識と照応させながら紹介できたためであった。一方で、100篇近くは掲載を拒否されている。アジアに独特の伝統知を扱ったものに多く、それらは同時代の欧米の研究者には受け入れられなかったことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：There were intellectual circle in the second half of 19th century to the first of 20th, and that spread from England to all over the world. Then Kumagusu could study Folklore, as a scholar known by the English readers, also he lived in Tanabe, far away from London, by wrote to the N&Q, he keep being in that circle. And his knowledge about Asia valued his himself. Corresponding with the N&Q in keeping live in Japan, he succeeded be a famous literate both in Britain and Japan.

研究分野：科学史

キーワード：南方熊楠 ネイチャー 科学史 科学誌

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

博物学者・民俗学者である南方熊楠(1867-1941)は、『ネイチャー』に51篇の論文が掲載されるなど活躍したが、遺品・資料は一部を除いては未整理のままであった。2001年以来、現在に至るまで、南方熊楠旧邸(南方熊楠顕彰館)での資料調査に携わってきた。熊楠は植物学、地質学、宗教学、民族学、文献学など多様なフィールドで活躍したが、これらを統合的に理解するために、近代イギリス史という立場から分析をつづけてきた。

かつて熊楠は超人的なイメージばかりが先行していたが、ようやく1990年代から松居竜五を中心に悉皆調査が開始された。これに参加し、主として『ネイチャー』などの洋雑誌と、そこに掲載された論文、英文草稿、欧米の研究者からの来簡を担当した。その成果は『南方熊楠邸資料目録』(2005年)ほかにまとめられ、さらに2006年の南方熊楠顕彰館の開館以降は、ロンドン時代についての展示を担当するなど、熊楠をイギリス史の文脈に位置づけ、理解し、またその成果を一般に還元する努力を続けてきた。

熊楠の英文論文については、そのすべて(計391篇)を、『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』(共訳、2004年)および『南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』(共訳、2014年)として翻訳・刊行した。この作業のなかで、熊楠が投稿したものの、掲載されなかった不掲載論文が約80通あることを発見した。

一方、『ネイチャー』誌や『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌には、19世紀半ばから多数のアジア人投稿者(日本人、中国人、インド人など)が存在したことも分かってきた。彼らはアジアに関する知識や情報を提供する役割を果たし、世界的な科学の発展に貢献していた。熊楠は広く知られており、研究対象となってきたものの、佐藤彦四郎のように数十篇が掲載されながらも、まったく知られていない人物も多い。

これらを受け、編著者となった『異端者たちのイギリス』(共和国出版、2016年)展示責任者となった「ロンドン時代の南方熊楠」(南方熊楠顕彰館、2016年)などでは、多数のイギリス史研究者および南方研究者の参加を請い、歴史的な文脈における熊楠の位置づけと再評価を試みた。

2. 研究の目的

研究の目的は、熊楠および他の日本人/アジア人研究者が、19世紀後半~20世紀前半の欧米学術界に、『ネイチャー』誌や『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌などへの投稿を通して、いかに貢献していたかを明らかにすることにある。

さらに、熊楠の活動を19世紀以降のイギリスの歴史的状況に位置づけることで、この時代に世界的に広がったフォークロア研究と、これまでは独立して考えられがちであった日本の民俗学との関係性を再確認することをめざす。

3. 研究の方法

研究の方法としては、くりかえし述べてきたように、歴史学の立場から熊楠を分析した。従来の研究は、個人としての熊楠に関心をもつもの、ないしは民俗学の立場からのものが多かったが、それに対して近代イギリス史の視点を導入した。すなわち、19世紀後半に科学者/研究者というプロフェッションが集団として成立し、同時期にイギリスが帝国化したことで、熊楠も欧米学術界にとりこまれたことを示した。そして、東洋からの知見の提供によって植物学や民俗学の発展に寄与した点を、歴史資料をもとに描き出すことを試みた。これにより、日本的な文脈から離れ、また熊楠を特異な奇才としてではなく、知的集団の一員として描くことに成功した。

あわせて、アジア人投稿者についての調査も行なった。『ネイチャー』誌と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌には、19世紀後半からインドを中心にアジア人投稿者がおり、たとえば、日本の佐藤彦四郎、インドの Kanhaiyalal、Virendra Vandyopadhyaya、中国の Duh Ah Co (漢字表記不明)、蔣彝らが挙げられる。こうした投稿者について調査し、当時の日本人研究者、さらに他のアジア人研究者の欧米学術界における役割と限界を明らかにした。従来は日本人のみに注目されがちで、なおかつ個別の論文のみがとりあげられることが多く、このようなアジアからの貢献を横断的に扱うことはなかった。その点でも、研究方法として採用するに意味があったと考える。

4. 研究成果

熊楠の英文論文に関する調査を、イギリスおよび和歌山で実施し、その成果を後述するような著書、論文、展覧会などで公開した。

イギリスでは、2018年2月、2019年2~3月、2020年2月に約20日間をかけ、『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌に掲載された論文/原稿を調査した。また、熊楠以外の投稿者についても調査した。これによって、熊楠およびアジア人投稿者たちを、同時代の誌面や欧米人投稿者との関係のなかに位置づけることができた。

和歌山の南方熊楠顕彰館では、草稿のほか、標本の包み紙に転用されていた下書きやメモについて調査した。さらに『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌編集部からの書簡について翻刻・翻訳し、日記その他の資料と付き合わせることで、熊楠が誌面においてどのような役割を期待され、また実際にはたしていたかを明らかにした。

19世紀後半に、『ノーツ・アンド・クエリーズ』や『ネイチャー』のような学術誌でありなが

らも、商業誌である雑誌群が出現したことによって、潜在的な知識人層の蓄積した情報が共有化され、科学や学問が急速に拡大した。そのことによって科学技術の社会における重要性が増し、現代へとつながっていく。

そのなかで熊楠が担った役割は、学問世界が世界化するなかで、ヨーロッパ/アメリカ的な知を、アジアからの情報によって相対化させることにあった。とくにフォークロア研究/民俗学の分野において、熊楠の論文は一定の程度まで受け入れられた。ただし、リジェクトされた論文、また熊楠の論文の被引用文献の調査からは、ヨーロッパ的な文脈から大きく外れるものについては、受け入れられなかった可能性が見えてきた。あくまでも熊楠は、欧米の学問世界にとって都合のいいインフォーマントとして機能していたのであり、それを越える活動は難しかったものと考えられる。

『南方熊楠のロンドン - 国際学術雑誌と近代科学の進歩』(慶應義塾大学出版会、2020年)では、熊楠によるイギリスの学術誌『ネイチャー』および『ノーツ・アンド・クエリーズ』への投稿について扱い、計約400篇にのぼる英文論文の分析により、熊楠の欧米の学問世界における位置づけと評価を明らかにした。当初は東洋専門のインフォーマントとして活動したが、1895年頃からは世界規模での比較研究を進めることとなり、帰国後は国際郵便網の利用により、和歌山にいながらにして世界レベルでの議論に参加しつづけた。『ネイチャー』などの学術誌は商業誌であり、なおかつ週刊誌として発行されたことで、科学の間口を広げると同時に、研究者間の議論を活発にし、科学の進歩をスピードアップさせた。同時にそこに参加した知識人や蓄積された情報を利用することによって、『オクスフォード英語大辞典』など巨大な辞書が次々と編纂されることにもなった。課題であった未掲載論考についても、その全体的な見取り図と分析を示すことができたであろう。同書は熊楠の英文雑誌での活動に関する決定版といえる研究であり、多くの書評が出た。生物学者が評者となったものもあり、多分野での反響が大きい。今後の分野横断的な研究の出発点となることが予想される。

『文学史の時空』(小峯和明監修、宮腰直人編、笠間書院、2017年)に収録された「南方熊楠論文の英日比較 - 「ホイットントンの猫 - 東洋の類話」と「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」では、熊楠が同一のテーマについて英語と日本語で書いた論文をとりあげ、それぞれの分析法、提示法、結論の共通点と差異を分析した。英文では有名なイギリス民話が実はアジア起源であることが主眼となり、邦文ではアジア起源の民話がイギリスに存在することが強調されている。これはフォークロア研究における伝播説の展開と、その受容の差によるものと考えられる。また、日露戦争後の日本の国際社会における存在感の変化と、日英同盟をはじめとした日英関係の進展を反映したものと位置づけられる。さらに、柳田国男が熊楠を民俗学研究的の広告塔として期待していたことを明らかにした。近年、研究の進捗の著しいフィロロギーの日本での受容という観点からも、インパクトの大きい研究となったと考えられる。

『他者としてのカニバリズム』(橋本一径編、水声社、2019年)に収録された「南方熊楠のカニバリズム - モースの大森貝塚からロンドン、そして和歌山へ」では、熊楠がモースの足跡を追うようにして民族学の研究を始め、『ネイチャー』への投稿もモースとの関係から着想されたと考えられる点を論じた。熊楠はロンドン時代に『ネイチャー』にモースの日本人食説を支持する論文を投稿したものの不掲載に終わる。帰国後の和歌山でも研究を進め、『サイエンス』『ノーツ・アンド・クエリーズ』に投稿するも、やはり不掲載となる。カニバリズムを通して西洋世界の野蛮性を指摘しようとしたものであり、その点が『ネイチャー』をはじめとする欧米中心主義的な科学界に受け入れられなかったのではないかと考えられる。

「イギリスとアジアを結ぶネットワーク - 南方熊楠と『ネイチャー』を中心に」(『ヴィクトリア朝文化研究』16巻、日本ヴィクトリア朝文化研究会、2018年)では、19世紀末の『ネイチャー』誌面におけるアジア関連の話題についてまとめ、そのなかに熊楠を位置づけた。インド、中国、日本に関わる話題の数と内容を示した。大部分は現地滞在のイギリス人/アメリカ人による投稿だが、一部には現地人の論文も見られる。知のネットワーク形成という点にも注目した。ほとんどはアジア各地とイギリスをつなぐのみで、アジアにおける横のつながりは形成されていなかったが、熊楠のみがネットワーク形成に成功していた。同学会は英文学研究者と歴史研究者による共同研究の場となっており、これまで熊楠についてとりあげられることの少なかった英文学の文脈に位置づけ、英文学者たちへアピールした点が重要であろう。とくに文学作品の生成と雑誌文化という点から、今後の展開が期待される。

「虎の腹稿における田辺抜書の利用 - 『太陽』掲載版への利用数の少なさを中心に」(『熊楠研究』14号、2020年)では、熊楠が論文執筆に際して、構想をまとめるためのメモ・下書きとして作成していた「腹稿」について調査した。多数の腹稿のなかから、もっとも重要と考えられている『十二支考』の「虎」を扱い、とくに「田辺抜書」からのメモの状況や、完成原稿への採用実態を分析した。全体としては、ロンドン時代に作成した書写集である「ロンドン抜書」、漢籍の『西陽雜俎』との比較も試み、熊楠において、和・漢・洋の知識がどのように配置され、組み合わせられ、研究成果として形作られていったかを明らかにした。この論文は、19世紀後半~20世紀前半にイギリスや日本で行われていた思考法・研究手法へと迫る研究でもあり、文学研究、情報学研究などへも敷衍化される可能性が高いと考えている。

「南方熊楠の人類学 - 『ネイチャー』『ノーツ・アンド・クエリーズ』掲載英文論考を中心に」(2018年6月23日、三田史学会大会、慶應義塾大学)では、熊楠の英文論文について、日本から遠いイギリスの学会に参加できた理由、アジアの古典を使うことで価値をもった点、世界規模

の比較を目指した点について口頭報告を行った。とくに 19 世紀ヨーロッパの人類学・民族学の成果を、熊楠がどのように取り入れていたかに注目した。なおかつ、当時の日本は人類学・民族学の対象となる地域でもあったのである。この両面性と、そのなかにあつていづれにも所属しており、なおかつどちらにも同一化しきれない熊楠の立場を、その英文論文のなかに読み解くことを試みた。

南方熊楠顕彰館における展覧会である「田中長三郎」展（2019 年 2 月 2 日～3 月 10 日）および「スウィングル」展（2019 年 6 月 1 日～7 月 7 日）では、熊楠の研究活動の国際的な広がりを示した。スウィングルはアメリカ農務省の植物学者・科学史研究者であった。田中は熊楠の研究協力者であり、ワシントンDCのスウィングルのもとで仕事をしたのち、台北帝国大学の教授として熱帯作物の研究に従事した。彼らの協力関係と、その国際的広がりが、いかに 20 世紀前半の科学に貢献したかを、実物資料をもとに展示したのがこの 2 つの展覧会であった。学術的な研究成果を、博物館という場で公開することにより、一般へも利益を還元することができたであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 志村 真幸	4. 巻 16
2. 論文標題 イギリスとアジアを結ぶネットワーク - 南方熊楠と『ネイチャー』を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6. 最初と最後の頁 111-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志村 真幸	4. 巻 70
2. 論文標題 南方熊楠とロンドンの二つの「森」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 BIOCITY	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志村 真幸	4. 巻 14
2. 論文標題 虎の腹稿における田辺抜書の利用 - 『太陽』掲載版への利用数の少なさを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 熊楠研究	6. 最初と最後の頁 66-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 南方熊楠の人類学 - 『ネイチャー』 『ノーツ・アンド・クエリーズ』掲載英文論考を中心に
3. 学会等名 三田史学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 南方熊楠と和歌山の食文化 - 郷土振興という側面から
3. 学会等名 日本と東アジアの<環境文学> (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 南方熊楠と和歌山の柑橘類 - 郷土振興という側面から
3. 学会等名 ASLE-JAPAN文学・環境学会第24回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 「ロンドン抜書」をどう読むか
3. 学会等名 2017年度南方熊楠研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 中村古峯、南方熊楠と神秘思想・異常心理
3. 学会等名 2017年度南方熊楠研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 「田辺拔書」をどう読むか
3. 学会等名 2017年度南方熊楠研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 南方熊楠から見たヴィクトリア朝 - イギリスとアジアを結ぶネットワーク
3. 学会等名 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第17回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志村 真幸
2. 発表標題 腹稿と「田辺拔書」
3. 学会等名 南方熊楠研究会 第5回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 鈴木 康史、志村 真幸、武田 悠希、熊谷 昭宏、高嶋 航、柴田 陽一、坂元 正樹、高井 昌史、大野 哲也、村越 真	4. 発行年 2019年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 289
3. 書名 冒険と探検の近代日本 - 物語・メディア・再生産	

1. 著者名 橋本 一径、都留ドゥヴォー 英美里、志村 真幸、フォルカー・デース、倉数 茂、木村 朗子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 219
3. 書名 他者 としてのカニバリズム	

1. 著者名 宮腰 直人編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 460
3. 書名 文学史の時空	

1. 著者名 志村 真幸、岸本 昌也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 共和国	5. 総ページ数 16
3. 書名 南方熊楠と和歌山の食文化	

1. 著者名 大石 高典、近藤 祉秋、池田 光穂編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 475
3. 書名 犬からみた人類史	

1. 著者名 志村 真幸	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 南方熊楠のロンドン - 国際学術雑誌と近代科学の進歩	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----